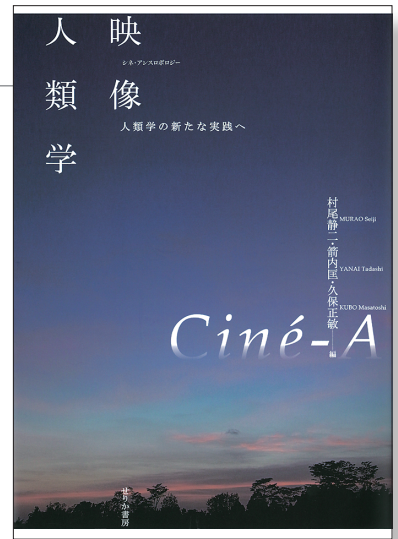


シネ・アンスロポロジー
映像人類学
 ——人類学の新たな実践へ

村尾静二・箭内匡・久保正敏編
 せりか書房 / 2014年 / 本体 2,800円 + 税



フランスの民族学者・映画制作者であり、映像人類学の確立において中心的役割を担ったジャン・ルーシュ(1917-2004)は、研究者と調査地の人々が、映像を作る・観る経験を通して研究成果を共有するなかに、文化人類学における映像の可能性、そして、文化人類学そのものの可能性を求めた。その試みは、映像の共有人類学(shared anthropology)といわれる。彼のこのような考えは、映像と文化人類学の実践が分かちがたく結びつこうとしている現状において、より輝きを増しているように思われる。それを多角的に検討するために、国立民族学博物館の共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論」(2009年度~2012年度、代表 村尾静二)が組織された。本書はその研究成果として刊行されたものである。

第I部「原点」では、映像人類学が学問として形成される以前に、現在とは比較にならないほど扱いが難しく、専門的な知識と経験が必要とされた映像機器を積極的に活用して異文化に分け入り、そこに生きる人々の生活世界や精神文化をとらえようとした研究者や映画監督の映像実践を選択的に取り上げ論じている。それらには、映像人類学の先駆であるがゆえに自由な視点で映像の潜在的な可能性が模索されており、映像人類学の可能性を大きく切り開くことになる。ここで取り上げられるのは、ロバート・フラハティ、渋谷敬三、そして、グレゴリー・ベイトソンとマーガレット・ミードの映像実践である。

第II部「シネ・アンスロポロジーの創造」では、民族誌映画と劇映画の制作を通して映像の共有人類学を果敢に推し進めたジャン・ルーシュの映像実践が論じられる。フランスと西アフリカを往復するなかで、パリの人類博物館を拠点に多数の民族誌映画を制作し、映画発祥国フランスにおける映画研究の拠点であるシネマテーク・フランセーズ館長も務めたジャン・ルーシュの熱意は、映像人類学が学問として確立し、広がっていく際の大きな原動力になった。ここでは、ジャン・ルーシュの多岐にわたる実践を、民族誌映画の制作、劇映画の制作、そして、教育者としての側面からとらえ、彼がいかに共有の思想を導き、実践したのかが明らかにされる。

第III部「映像の共有人類学」では、実際に共同研究メンバーの映像実践が詳述される。論者のなかには、映像人類学の専門家もいれば、はじめて映像実践を試みたものもあり、映像を専門としない読者にも参考になる内容となっている。最初に論じられるのは、成長とともに変化する子どもの内面と生活世界の映像記録、及びそれが社会の記憶となっていく様子である。ついで、土器の形成技法の映像記録を通して、民族技術が社会のなかでどのように伝承されているのかが明

らかにされる。そして最後に、映像を調査地で上映することは、文化人類学に基づく調査者の視点そのものを人々と共有することであることが、執筆者自身の経験をもとに語られる。

第IV部「民族誌映像の発信・保存・再利用」では、近年、その重要性が唱えられるアーカイブズの課題が広く検討される。最初に論じられるのは、海外文化を紹介する民族誌番組をプロデュースしてきた牛山純一が日本のマスメディアで果たした役割についてである。ついで、国立民族学博物館における映像の保存・活用方法、デジタル化にともなう課題が説明される。そして最後に、研究者が蓄積してきた民族誌データを調査地の人々と共有するために、双方が利用可能なシステムでデータベースを構築する様子が論じられる。

第V部「作品解説」では、本書の理解をより包括的にするために、映画の誕生から現在までの映像人類学に関する作品を27の項目から網羅的に取り上げ、解説している。わが国では海外の代表的な民族誌は紹介され、翻訳書も多いのに対し、民族誌映像はそうはなっていない。そのため、優れた民族誌映像を紹介してほしいという依頼を受けることが多い。このような要望に応えるために、巻末に「映像作品視聴ガイド」を付し、本書で取り上げた映像作品の入手先情報をまとめている。

以上に加え、本書関連「民族誌映画DVD」が用意されている(本書にある引換券を出版社に送ることにより入手可)。ここには、ジャン・ルーシュのもとで制作された大森康宏(国立民族学博物館名誉教授)の『ジブシー・マヌーシュの生活』(イタリア・パレルモ第2回地中海に関する映像人類学映画大会グランプリ受賞、1985年)を含む、共同研究会メンバーによる作品が収録されている。

このように、本書は、ジャン・ルーシュの構想を起点として現在の理論的課題に応え、映像人類学の歴史をとらえ直すことにより、映像による新たな文化人類学をより確かなものとする内容になっている。映像はすでに映像人類学だけの問題ではない。文化人類学・映像人類学の教材として、あるいは、映像実践を試みる際の手引きとして、本書が広く役立てられることを期待している。

文 村尾静二

立教大学現代心理学部映像身体学兼任講師。専門は映像人類学。文化人類学。インドネシアにおける身体技法、宗教実践、上演芸術。共編著に『フィールド映像術』(分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編 古今書房 2015年)、『現代映画作家を知る 17の方法』(濱口幸一・村尾静二編 フィルムアート社 1997年)。民族誌映像インスタレーション『光の影の往来——バリ島の影絵人形芝居ワヤン・クリ』(長野県茅野市民館 2013年 12月 8日)。